

「琉球の茶の湯―薩琉外交にみる喫茶儀礼の展開―」

目的 王府と日本の正式な国交が開始され、その後17世紀から薩摩を介して交流が深まってゆく19世紀にかけての、薩摩との交流にみられる喫茶文化を考察する。それとともに王府でどのような喫茶習俗が、いかなる意味や目的で受容され、展開したのかを明確にし、日本風の喫茶儀礼がどのように定着していったのかを考究する。

第一章 喫茶儀礼の展開

[1] 接見の喫茶

16C 薩藩と琉球遣使 …1575・1585 鹿児島城対面所 島津家久と琉球遣使の接見の茶礼

江戸上り…1644～1850 対面所・虎之間 掛物・中央に香爐・生花の設え「表御小姓」「表坊主剃髪・十徳」による給仕

王府の接見…1748 首里城奥御書院 国王と江戸上り遣使帰国の接見の喫茶

□18C 王府の接見に書院の座敷による喫茶

[2] 歓待・交歓の喫茶

柳営……1610 駿府城・1638 江戸城茶室 秀忠による茶の湯 1644～1850 江戸城大広間・黒書院 交歓の宴

薩藩……1644～1850 鹿児島城・別業の御茶屋 交歓の宴 1731 鹿児島城鶴苑の茶会

王府……1667「羽地仕置」 1690 首里城御数寄座 王世孫による茶の湯

1692 内裏御数寄座創建 王による茶の湯 18C 王府内で各種芸能と茶の湯・宴の記録(8件以上)

□17C末 王・王子と高官の茶会

①外交上必要な要素 ②日本の喫茶儀礼の享受と、機関の機軸を提示

[3] 「御成」の喫茶

薩藩…1628 将軍御成の準備で王府へ唐物買付、植木召寄 1630 家光の数寄屋御成で琉球楽童子の奏楽

王府…1627 在番奉行創建 1631 在番への饗応 ⇒数寄屋御成りの類型

18C後半～19C 在番招請の設え⇒日本の武家故実や、薩藩などの設えを踏襲

1626・27 唐物所望の注文書 1628 王府へ将軍御成りに必要な唐物買付の注文書

1634・36 粗悪品を高額で購入したとの責任追及により担当者の処分⇒薩藩の唐物需要を理解する必要性

1610 尚寧王は家康に食籠・折敷の漆器を聘礼 1612 王府機関「貝摺奉行」の設置

18C後半 貝摺奉行⇒輸出漆工芸品の需要の把握による経済活動の発展

□唐物仲買・漆工芸品輸出の実態

1629宮古島・1632八重山諸島に王府の在番制導入

間切頭職の首里官僚在番への接待…八重山諸島石垣島宮良御殿所蔵

『伊勢故実』(1817写) 『諸式法』(茶・藪内流) (1829写)

□内政の地方統治に日本式喫茶儀礼を採用

■日本式喫茶儀礼の享受

①平穏な外交関係の構築 ②対日交易のニーズの把握による経済活動の発展 ③内政の地方統治に応用

〈小結〉日本式喫茶儀礼の定着の過程には、自主性を失った従属国が、単に茶を媒体とした儀礼の同一化にむかったというよりは、独立国の保持、経済発展、内政への活用など、より主体的な意義や目的も見出されていただろう。

第二章 喫茶儀礼の定着

[1] 職制の展開

柳營…1601 「御茶道(頭)」

薩藩…1638 薩藩日向都城「茶道役」 1675～1704 薩藩「奥御茶道」 1702 薩藩「御茶道」

王府…1649 「御茶道職」茶春英 一幼・少年期に2回上国、五年滞在

1671 「御茶御殿奉行」 1676「御茶道頭(之首長)(長)」

1719 俗称「宗叟」「御茶湯」六名 1728「御茶道」一医者・御茶道共に剃髪・黒頭巾・黒羽織風の着衣

1773 「…御醫者及御茶道平常剃髪至薩州亦不改茲奉薩州之命不可爲日本之貌改爲琉人之貌可也遵即改爲俗貌」

□「御茶道」⇒17Cの武家社会に浸透した形態 茶春英の茶道職制定⇒薩藩の茶の伝授者

[2] 下賜茶の展開

薩藩…1616 国質の佐敷王子へ茶と消耗茶道具の下賜 琉球使節へ日本式儀礼の消耗品と、茶の下賜の定着

王府…1719 上国帰国の王子より高官へ土産の下賜茶 19C 首里士族の贈答・下賜品に中国茶・日本茶

□薩摩藩主の下賜茶⇒日本式喫茶儀礼の定着 王子の下賜茶⇒士族間の日本式喫茶の普及

■日本式喫茶儀礼の定着

①薩藩の茶を学んだ「御茶道」の導入 ②薩摩藩主の下賜茶の定着

〈小結〉日本式喫茶儀礼の定着は、主に薩藩上国により授かっており、下賜茶の状況からは薩藩の慫慂もあろう。一方、「御茶道」職の導入では、王府の積極的な方針も窺える。王府における日本式喫茶儀礼は、決して一方向性ではなく、薩・琉、両者の相関関係により、展開、定着していったと考えられる。

結語 王府では、薩藩を模範とした喫茶儀礼を積極的に享受していた。その第一の目的とは、序列関係すなわち、従順な従属国の姿勢を示し、独立国として王府を保持することにある。また薩藩も、関係の安定に喫茶儀礼の定着は有用であろう。そして王府の日本式喫茶儀礼の定着の過程には、漆工芸品などの輸出先のニーズを把握し、経済活動を発展させる目的や、離島掌握として応用されており、王府のより主体的意義が見出せる。琉球王府の日本式喫茶儀礼の享受とは、薩・琉それぞれの意図を背景にした交流の中で展開し、定着していった。

附論 王府では1404年に明から冊封を受け、清代1866年まで24回の冊封があった。4～8ヶ月の冊封使滞在中には、冊封の儀のほか、「諭祭」「冊封」「中秋」「重陽」「餞別」「拝辞」「望船」の七宴が、首里城御庭や北殿などにおいて、曲奏を用いて行われた。王府の対日外交は首里士族が中心であるのに対し、中国外交は主に久米村士族が担っており、七宴の迎賓儀礼は中国外交のみにみる儀礼である。王府では目的により多様な喫茶儀礼を使い分け、重層的に進展させていた。